主日礼拝説教 「連れて来られただけなのに…」

日本基督教団石神井教会　2018年2月4日

【使徒書日課】ヤコブの手紙　5章13～16節

13あなたがたの中で苦しんでいる人は、祈りなさい。喜んでいる人は、賛美の
歌をうたいなさい。14あなたがたの中で病気の人は、教会の長老を招いて、主の
名によってオリーブ油を塗り、祈ってもらいなさい。15信仰に基づく祈りは、病
人を救い、主がその人を起き上がらせてくださいます。その人が罪を犯したので
あれば、主が赦してくださいます。16だから、主にいやしていただくために、罪
を告白し合い、互いのために祈りなさい。正しい人の祈りは、大きな力があり、
効果をもたらします。

【福音書日課】マルコによる福音書　2章1～12節

1数日後、イエスが再びカファルナウムに来られると、家におられることが知
れ渡り、2大勢の人が集まったので、戸口の辺りまですきまもないほどになった。
イエスが御言葉を語っておられると、3四人の男が中風の人を運んで来た。4しか
し、群衆に阻まれて、イエスのもとに連れて行くことができなかったので、イエ
スがおられる辺りの屋根をはがして穴をあけ、病人の寝ている床をつり降ろした。
5イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、「子よ、あなたの罪は赦され
る」と言われた。6ところが、そこに律法学者が数人座っていて、心の中であれ
これと考えた。7「この人は、なぜこういうことを口にするのか。神を冒涜して
いる。神おひとりのほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。」
8イエスは、彼らが心の中で考えていることを、御自分の霊の力ですぐに知って
言われた。「なぜ、そんな考えを心に抱くのか。9中風の人に『あなたの罪は赦
される』と言うのと、『起きて、床を担いで歩け』と言うのと、どちらが易しい
か。10人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、
中風の人に言われた。11「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に
帰りなさい。」12その人は起き上がり、すぐに床を担いで、皆の見ている前を出
て行った。人々は皆驚き、「このようなことは、今まで見たことがない」と言っ
て、神を賛美した。

主イエスにお会いするために

日曜日の朝、礼拝の始まる前の時間に、教会堂の玄関に立って、おいでになられる皆さんをお迎えさせていただくことがあります。すると、中には、牧師の顔を見るなり驚いたような表情をなさって、慌ててご挨拶くださる方がいらっしゃいます。教会に牧師がいるのは当たり前なのですが、日曜日の礼拝においでになられるときには、必ずしも牧師に会うつもりで教会堂に向かっているわけではない、ということなのかもしれません。日曜日の朝、目覚めたときから、支度をして家を出て教会に向かい、礼拝堂に着席するまで、その方の心には、ただ一人のお会いしたい方のことだけが思い浮かべられているのに違いありません。そのような方の思いを邪魔しないように、わたしも、皆さんを入口でお迎えするときには、短いご挨拶のほかには余計なことを口にしないようにしております。ただ、礼拝堂にまっすぐ向かっていただけるように、させていただきたいのです。

わたしたちが礼拝に集まって来てお会いしようとしているお方。それは、主イエス・キリストです。「神にお会いする」と言うこともできるかもしれませんが、わたしたちは、その前にまず、主イエス・キリストとお会いするのです。主イエス・キリストとお会いすることを通して初めて、わたしたちは、神とお会いさせていただくことができる。ですから、わたしたちは、何よりも、主イエス・キリストとお会いするために、礼拝に集まってきているのです。

しかし、それにしては、教会で主の日ごとに集まって行われる礼拝には、わたしたちの目を主イエス・キリストから他のものに向けさせてしまう余計なものが、多すぎるようです。礼拝中、他の人の姿が気にならない方は、いらっしゃらないでしょう。そもそも、礼拝で牧師が目立ちすぎて気になるという方も、きっといらっしゃると思います。主イエス・キリストとお会いしようというのならば、わざわざそのような中で礼拝をしたりせず、互いに時間をずらして、分散して礼拝にあずかった方がよいようにも思えます。大勢の人と一緒の礼拝で、結局気が散って主イエス・キリストとお会いできなかった、という思いを抱いてお帰りになられることがあるとしたら、残念なことです。

それでも、わたしたちは、このように皆が一度に集まる形の礼拝をやめることはないでしょう。もちろん、ただ一人で祈りを深める中で主イエス・キリストとお会いする、ということも有ってよいし、そのような時を、一人ひとり自分の生活の中に設けるべきだと思います。けれども、そのような一人の祈りの中で主イエス・キリストとお会いするということを、わたしたちは、いつもできるわけではありません。むしろ、わたしたちは、大勢で集まる礼拝の中でこそ、主イエス・キリストとお会いさせていただけるのです。いいえ、大勢である必要もない。ただ二人または三人で集まるところに、主イエス・キリストはおいでくださって、お会いくださる。一人では主イエスを見出せなくなっているときにも、二人、三人、あるいは大勢で集まるところで、わたしたちは、主イエスを見出せる。主イエスとお会いできる。主イエスは、そのような集まりの中においでくださって、お会いくださると、わたしたちは信じて、集まり続けているのです。

連れて来られて

主イエス・キリストは、わたしたちが互いに集まってささげる礼拝のただ中に、おいでくださっています。今ここに、おいでくださって、わたしたちにお会いくださっているのです。

「しかし、そうは言っても、どこにも主イエスのお姿は見えない」とおっしゃられる方があるかもしれません。後ろのほうの席に座られていて、「やっぱり、前のほうの席に座らないと、主イエスを見ることはできないのか」と思われている方もあるかもしれません。しかし、きっと前のほうに座られている方の中にも、「こんなに前に座っているのに、主イエスのお姿が見えない」と思われている方があるかもしれません。「見えるのは、牧師の姿ばかり」と。それとも、聖餐卓に用意されるパンと杯こそ主イエスのお姿だ、ということでしょうか。

今日の福音書では、大勢の人が主イエスにお会いしようと、主イエスのいらっしゃる家に詰めかけました。家はすし詰め状態です。おそらく、家の一番奥に座って語られている主イエスのお姿が見えていたのは、すぐ近くに陣取った数人だけだったでしょう。多くの者たちは、主イエスのお語りになられる声は聞こえても、そのお姿を見ることはできませんでした。あるいは、遅れて来て家の戸口辺りに立つことしかできなかった者たちは、主イエスの声さえ聞くことができなかったかもしれません。

けれども、この人たちは、あきらめて帰ってしまうことはありませんでした。見えるのは、自分の前に立っている人の背中ばかり。聞こえるのは、一番奥で主イエスがお語りになられたことを伝言ゲームのように繰り返して伝えてくれる誰かの声ばかり。それでも、目の前の人の背中の先に、その肩越しに、主イエスのお姿を見出していたからです。伝え聞いた主イエスの言葉を繰り返してくれる人の声の中に、主イエスのお語りになられる御声を聞き取っていたからです。

そうであればこそ、その、家の一番奥にお座りになられているであろう主イエス・キリストのもとに誰彼を連れて行きたいと願った者たちがいました。一人の、寝たきりの中風の人。自分の足では、到底、主イエスのいらっしゃる家にまで来ることのできなかった者を、運んできた「四人の男」たちです。中風の人自身が、そのことを望んだのでしょうか。望んだにしても、望まなかったにしても、「四人の男」たちに担がれることなしに、この人は、主イエスのもとに来ることはできなかったのです。

それにしても、ここに描かれる物語は、少し突拍子もない展開をしています。家が大勢の人でいっぱいだったので、四人の男たちは、中風の人を担ぎ上げて、屋根をはがして穴をあけ、主イエスの目の前につり降ろした、というのです。実際に、そういう出来事があったのでしょう。しかし、この少しばかり乱暴なやり方をした出来事を、主イエスは心に留め、弟子たちに繰り返しお語りになられたのではないでしょうか。この出来事を弟子たちも繰り返し想い起すようにさせられたのではないでしょうか。だからこそ、そのとき主イエスが何をお考えになられていたのか、何に目を向けられていたのか、伝えられているのです。

担ぐ者となる

主イエスは、そのとき、「**その人たちの信仰を見て**」いました。それは、しかし、彼らの信仰心を見て取られた、ということではないようです。主イエスは、もちろん、人の心の思いを読み取ることがおできになるお方です。この場面でも、律法学者たちの心の中の思いを見て取られています。ただし、そのことは、「**ご自分の霊の力ですぐに知って**」と描かれるのです。主イエスが「**信仰を見**」られたというのは、本当にご覧になられたということなのです。

信仰というものが単に内心の問題であれば、目で見えるものとはならないでしょう。けれども、主イエスはそのとき、確かに「**その人たちの信仰を見**」られた、というのです。「信仰」は見えるものだというのです。

実際にこのとき主イエスがご覧になられていたのは、ご自分の周りに集まってきている人々の姿でした。その人々の背後にいて、なお主イエスのもとに一人の仲間を連れて行こうと思った人たちの姿でした。自分一人では何もできず、場合によっては家族や仲間たちからも見放されて、放っておかれたかもしれない、一人の中風の人。その一人の者を放ったらかしにすることなく、四人がかりで担いで、主イエスのもとにつり降ろした四人の男たち。彼らの間にあったのは、互いに対する信頼関係であったでしょう。その彼らを互いに結び合わせた信頼関係は、主イエスという一人の信頼を寄せるに値するお方を前にして、ひとつの行動という見える形になって、表されたのです。それが、主イエスのご覧になられたものでした。ご覧になられた「信仰」でした。彼らの間の信頼関係。彼らの主イエスに対する信頼。それが、主イエスが「見た」とおっしゃられる「信仰」でした。

そうであればこそ、主イエスは、このとき、直ちにお告げになられたのでしょう、「**子よ、あなたの罪は赦された**」と。罪ある者とは関係を持つべきではない、と考えられていました。罪人と関わる者は、その者も罪人同様にみなされていました。そして、病人やさまざまな事情のある者が、罪人とみなされていました。あの中風の人も、そのように罪人の一人とみなされかねない状況に置かれていました。しかし、彼は、仲間たちから、罪人同然に扱われるのではなく、仲間の一人として、互いに信頼をもって支え合い、担い合う関係の中に、迎えられていました。いいえ、それは、そこに主イエスという真に信頼に値する方がいらっしゃることで起こった、新しい関係だったのかもしれません。

彼は、仲間たちに担がれ、運び込まれて、主イエスを見る者とされました。主イエスは、その彼を、起き上がらせ、今まで自分が乗せられていた床を担ぐようにと命じられました。今度は、彼が、だれかをその床に乗せて担ぐ番なのです。一人の人をそこに乗せ、担いで、主イエスのもとにお連れするのです。

罪は赦されたのです。主イエスのもとから、新しい、信頼に基づく関係が始まったのです。それは、わたしたちを見える行動へと向かわせるものです。主イエスはご覧になられているのです。だれかに担がれて主イエスのもとに連れて来られた者が、今度は、だれを担いで連れて来るようになるのか、と。「起き上がりなさい。今度は、だれかの床を担いで、主の家に帰ってきなさい」と。